11.「南清地方」をカバーする「清國二十万分一圖」について：アジア歴史資料センターの小山史料所収図の検討から

小林　茂（大阪大学名誉教授）・片山　剛（大阪大学名誉教授）

筆者らがここ十数年間検討をつづけてきた「清國二十万分一圖」は、1880 年代に参謀本部から派遣されて中国大陸を旅行した陸軍将校の残した測量データを編集し、日清戦争に際して印刷した軍事用地図である。将校たちがコンパスと歩測によって作製したルート・マップを、英国海図など、その頃までの近代測量の成果を参考に編集して、20 万分の 1 の縮尺で示している。四隅に経緯度を示すが、主要都市を結ぶ交通路を主に示すにすぎず、空白のめだつものが少なくない。筆者らの研究の初期には、近代測量のおくれた東アジアでは、まずこのようにして軍事用の地図が作られたという点が注目された。とくに彼らの作製したルート・マップの多くがアメリカ議会図書館地理・地図部に収蔵されており、これを「清國二十万分一圖」と比較対照することにより、この時期の地図の編集の実態に迫ることができたことは重要な成果であったと考えている（小林編 2017: 76-163、アメリカ議会図書館・大阪大学・スタンフォード大学・国立国会図書館蔵の「清國二十万分一圖」の目録については同 253-259 を参照）。

こうした「清國二十万分一圖」が日清戦争開始期までにカバーしていたのは、盛京省（今日の遼寧省）から直隷省（今日の河北省の一部）、および山東省で、日清戦争や日露戦争で利用されることとなった（**図 1**）。台湾遠征（1874 年）以降、日本軍は清国との戦争を予想し、とくにアロー戦争時に作製された英国製図およびフランス製図を複製して検討しており、それを通じてこのカバー範囲が決定されたと推定される。

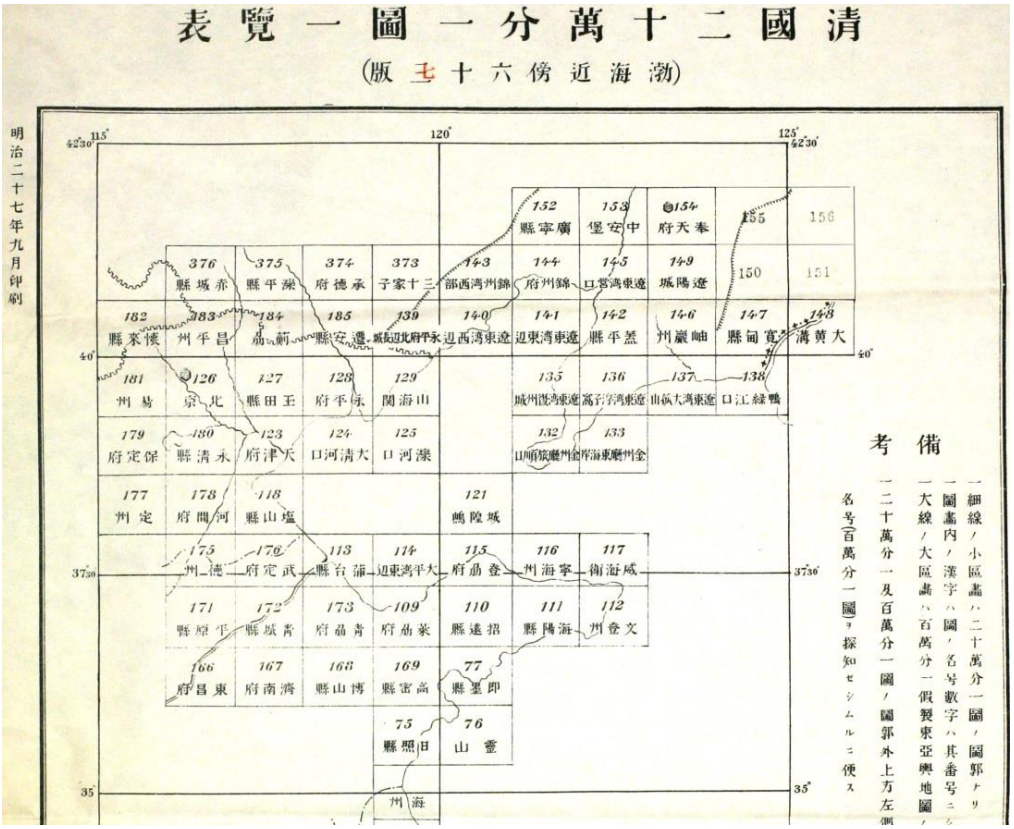

図 1：「清國二十万分一圖一覧表」（アメリカ議会図書館蔵）の北半部

ただし陸軍将校の旅行と彼らの残したルート・マップは上記の範囲をはるかにこえる範囲におよんでおり、雲南省にまで及ぶ。それらの利用がどのように行われたのか気にかかっていたが、上記の範囲外について作製された「清國二十万分一圖」を見ることはなかなかできなかった。しかし、この間研究の焦点を日清・日露戦争期に移してみて、アジア歴史資料センターが公表している「小山史料」に、「南清地方」をカバーする「清國二十万分一圖」があることが判明した。「南清地方」とは、当時の陸軍資料にあらわれる用語と考えられ、これらを検討すると、江蘇省や浙江省、福建省にくわえ、江西省、湖北省、安徽省にも及ぶ。以下ではこれらについて、基礎的な事項を記載し、今後の研究に備えることとしたい。本来であれば、防衛省防衛研究所で小山史料を参照すべきであるが、新型コロナウイルス流行のため、今回はアジア歴史資料センターの画像によって作業を進めたい。

以下、まずこの地図群がおさめられている「小山史料」の特色をみたあと、その「清國二十万分一圖」の現況に触れ、さらにそれを構成する図のカバー範囲などを検討したい。

1.「小山史料」について

「小山史料」は陸軍将校、小山秋作（1862－1927年、長南［2012a］による）の所蔵していた資料である。ただし「小山秋作經歴」（アジア歴史資料センター資料：C14020387400）が非公開となっていることもあり、不明な点の多い小山の活動を追跡するのは現在のところ困難である。今までの研究を参照すると（高遠 2007；長南 2012）、小山は基本的に情報将校として活動したと考えられる。

小山の「南清地方」との結びつきは、北清事変（義和団事件）後の1901年に福島安正（当時は参謀本部第二部長［長南2012b］）とともに行ったこの地域の旅行からみて、かなり緊密であったと思われる。張之洞をはじめとする有力な地方官僚に会見し、日本への留学生の派遣を勧めるなど、注目される活動を行った。小山史料に含まれる資料も小山と「南清地方」との結びつきを示唆する。

その一つは「福建省ニ對スル計画案」（アジア歴史資料センター資料：C13032437900～C13032439200）で、時期は1899（明治32）年とされるが、末尾の表7から1900年11月以降のものとわかる。その内容は福州および厦門への進攻計画で、1900年8月の「厦門事件」を連想させる。厦門本願寺布教所の焼失を契機に、治安維持を名目に停泊軍艦から陸戦隊を上陸させたこの事件では、列国の抗議を受け、さらに現地社会の反発も強く、日本は台湾からの兵力派遣を断念し、陸戦隊を撤退させた（菅野1990）。ただし、これで日本はこうした「南清地方」への進出をあきらめたわけでなく（高1997）、後述するように「厦門事件」以後に測量技術者を送って、現地社会の反発にもかかわらず福建省の地図作製を実施させた。この進攻計画もその一環であろう

もうひとつは『福建省沿道誌、巻之二』（アジア歴史資料センター資料：C13032450600～C13032452100）である。「沿道誌」というタイトルをもつ小冊子は、日清戦争以後日露戦争までの間に刊行された行軍用のルート案内書で、上記「福建省ニ對スル計画案」とセットのものとして考えるべきものであろう。冒頭に厦門より福州南台に至る沿道の地誌を掲載する。また末尾に「第一號福建省一般圖」（100万分の1）・「第貳号福州閩江防禦略圖」（62,200分の1）・「第參號福建省厦門江防御略圖」（10万分の1）（アジア歴史資料センター資料：C13032452200～C13032452500）を付す。この刊行は1900年10月と考えられ（小林2017）、福建省進攻にあわせて準備された可能性が高い。

このほか福島安正少将に宛てられた1901年7月付の「清國駐在並應聘將校ニ關スル鄙見」（陸軍歩兵太尉橋本齋次郎による）も、北清事変における「南清地方」在勤の陸軍将校の実情を例として挙げており、関連するものと考えられる。小山自身、時期は特定できないが、「南京練將學堂」に庸聘されていたことがあったようで（アジア歴史資料センター資料：B07090025500）、この地域の20万分の1図を保持するような事情があってもふしぎはないと考えられる。

2.「小山史料」の「清國二十万分一圖」の特色

つぎに「小山史料」の「清國二十万分一圖」の特色に移りたい。共通して、図郭のまわりが切り取られており、そこに印刷されていた文字や縮尺は、図幅の裏側にまとめて貼り付けられている。「清國二十万分一圖」では、図郭のまわりに製版時期など印刷時期を示す情報が印刷されているのが普通であるが、その部分は貼り付けられておらず、作製年代を知ることができないのは残念である（後掲の図3・図4を参照）。「清國二十万分一圖」の各図は東西が経度の1度、南北が緯度の40分をカバーし、図の四隅に経緯度が表示されている。ただし図の中には、その部分も切り取られている場合が多い。

さて貼り付けられているのは図のタイトルと縮尺（「支那里・日本里」・「吉米」［キロメートル］・「輿地里」）のほか、隣接図との位置関係を示す図がある。3（東西）×3（南北）の9つの区画の中央に当該図を置き、各区画に記されるのは図の番号だけである。このほかに見られるのはゴム印によると考えられる長方形の枠で、中には「參謀本部第二部」のほか、地図の号数や部数を示すための文字がみえる。そこには手書きで陸図と書きこまれている。これから、「小山史料」の「清國二十万分一圖」は参謀本部の備品であったことがうかがえる。

すでに触れたように「清國二十万分一圖」のもとになったルート・マップは1880年代の陸軍将校の旅行による。他方その編集・印刷は図1に示した範囲については日清戦争開戦までにほぼ終了していた。これ以外の地域については、その後に編集・印刷が行われたと考えられる。これに関連して注目されるのは、図1に示した図示範囲の南側には図の番号は示さずに簡略化されたタイトルが記入された区画が並んでいる点である。この範囲については、日清戦争開始期までに印刷が終了した図に引き続いて編集と印刷が行われた地域ということになろう。

『陸地測量部沿革史（草案）』（自明治21年5月至基本測図完了）の明治29年の条に、同製図科の同年の事績として「兵要圖」のうち「南清地方其他」について50面の製版が実績としてあげられている（陸地測量部n.d.: 88-89）。この『陸地測量部沿革史（草案）』は、公刊された『陸地測量部沿革誌』の原本と考えられるもので、外邦図の作製についての記述が多い。この記載は、日清戦争に際し当面必要な図を編集・印刷し、つづいてそれらを改訂しつつも、それが一段落した時期には別の地域の図の刊行に着手したことを示しているといえよう。

3. 小山史料の「清國二十万分一圖」の目録とカバー範囲

つぎに小山史料の「清國二十万分一圖」の目録を示そう。アジア歴史資料センターの提供する地図画像は、大きく江蘇省、浙江省、湖北省の三つに区分されている。以下で示す表ではこの区分に従うが、各区分では緯度の高い方から低い方へ、また同緯度では東から西に配列して必要項目を記載する。

表1：江蘇省

番号	図番号	タイトル	経度	緯度
1	66	清國江蘇省　高郵州寶應縣	119-120°E	32°40-33°20'N
2	64	清國江蘇省　呂四場屈港鎮	121-122°E	32°-32°40'N
3	63	清國江蘇省　如皋縣泰興縣	120-121°E	32°-32°40'N
4	62	清國江蘇省　鎮江府丹陽縣揚州府儀徵縣泰州	119-120°E	32°-32°40'N
5	59	清國江蘇省　太倉州鎮洋縣嘉定縣崇明縣寶山縣	121-122°E	31°20'-32°N
6	58	清國江蘇省　無錫縣蘇州府長州縣元和縣吳縣通州靖江縣江陰縣崑山縣新陽縣	120-121°E	31°20'-32°N

7	57	清國江蘇省　常州丹陽縣栗水縣句容縣	119-120ºE	31º20'-32ºN
8	55	清國江蘇省　松江府上海縣南滙縣奉賢縣	121-122ºE	30º40'-31º20'N
9	54	江蘇浙江省　湖州府嘉興府呉江縣嘉善縣	120-121ºE	30º40'-31º20'N

注：アジア歴史資料センター資料：C1032448900～C13032449700

表2：浙江省

番号	図番号	タイトル	経度	緯度
1	107	清國浙江省 定海廳	122-123ºE	30º-30º40'N
2	106	清國浙江省 餘姚県	121-122ºE	30º-30º40'N
3	105	清國浙江省 杭州府錢塘縣仁和縣海寧縣海塩縣石門縣蕭山縣	120-121ºE	30º-30º40'N
4	104	清國浙江省　桃花島六横山	122-123ºE	29º20'-30ºN
5	103	清國浙江省　寧波府奉化縣慈谿縣鎮海縣象山縣	121-122ºE	29º20'-30ºN
6	259	清國浙江省　紹興府諸暨縣浦江縣上虞県新昌県	120-121ºE	30º-30º40'N

注：アジア歴史資料センター資料：C13032448200～C13032448700

以上、**表1**ならびに**表2**に示した各図の位置を示したのが**図2**である。この図は図１のベースマップとした「清國二十万分一圖一覧圖」（アメリカ議会図書館G7820s s200 .J3）の下部をベースマップとして、図番号を斜体で記入したものである。これから江蘇省～浙江省の海岸部をカバーしていることがわかる。

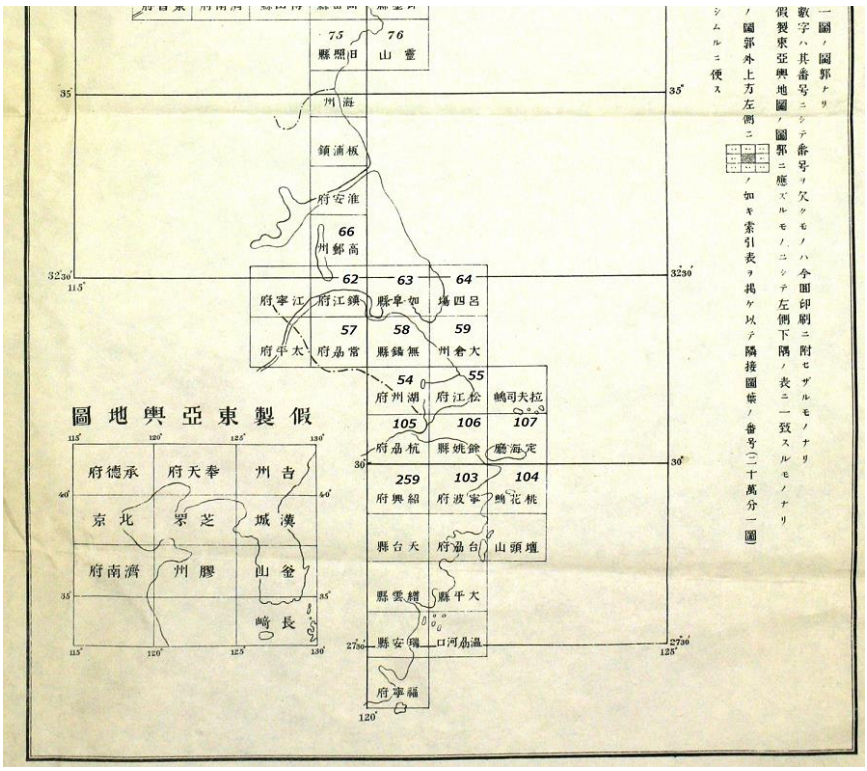

図 2：「清國二十万分一圖一覧表」（アメリカ議会図書館蔵）の南半部
（太字の図番号は、表 1 および表 2 により筆者加筆）

表3：湖北省

番号	図番号	タイトル	経度	緯度
1	239	清國湖北省　黄陂縣	114-115°E	30°40'-31°20'N
2	248	清國湖北省　漸州漸水縣廣齋縣黄梅縣大治縣	115-116°E	30°-30°40'N
3	247	清國湖北省　黄州府黄岡縣武昌府漢陽府漢口鎮	114-115°E	30°-30°40'N
4	187	清國湖北省　九江府南康府湖口縣彭寧縣	116-117°E	29°20'-30°N
5	186	清國湖北省　興國州徳安縣瑞昌縣	114-115°E ただし誤記で115-116°N	29°20'-30°N

注：アジア歴史資料センター資料：C13032449900～C13032450400

表1ならびに表2に示した図群は江蘇省と浙江省の海岸部をカバーするのに対し、**表3**に示した図は内陸部をカバーし、長江中流沿岸域となる。長江の流路について詳しい記載があるのは、これらの図群が英国の作製した長江の水路図を元図に使用しているからと考えられる。ただし元図となった英国水路図はまだ特定できておらず、それは今後の課題としたい。

4. 表1及び表2に示した20万分の1図の利用例

さらに上記の「清國二十万分一圖」の利用について判明している例があるので紹介しておきたい。1900 年 11 月以降、陸地測量部の測量手、久間金五郎は 3 名の雇員を率いて厦門をはじめとする福建省の測図に従事した。この作業は 5 万分の 1 図を作製するためのもので、現地に派遣されていた藤井幸槌大尉の指揮を受けることになっていた。藤井に指示された任務は、久間らの指揮のほか、「福州、泉州、厦門間及ヒ厦門、龍岩、漳平、厦門間ノ道路、同ク沿道ノ地形、水利、鉄道布設ノ難易、及ヒ福州厦門間上陸点ノ研究」にくわえ、これらの地域の「軍事統計ノ概略」の把握であった（アジア歴史資料センター資料：C09122651300; C09122644500、1900 年 10～11 月）。これからすると、久間らの測図作業は、上記のように継続して構想されていた福建省への進攻計画のための調査の一環であった可能性が高い。

上記の「厦門事件」のあとで住民の対日感情は悪く、久間らは投石を受けるほか宿泊拒否、さらには地名を教えないなど協力も拒否され、とくに 1901 年 5 月 22 日には、雇員の河野亮之介が泉州府晋江県で住民に襲われ、荷物を奪われ、福州方面に転ずるという事態も発生した（アジア歴史資料センター資料：C03022798900; C09122769900）。同年 10 月に厦門を訪れた福島安正らは久間に会い、測図作業の成果である原図を閲覧し、その経験談を聞いている（アジア歴史資料センター資料：C13032445500）。これには小山秋作も立ち会った可能性が大きい。

他方、福建省での作業終了後の「帰朝ノ途次」に浙江省の測図を行うことが福島安正の意見により決定されて、久間らは 1902 年 3 月よりこれに従事することとなった。この場合は福州駐在の與倉喜平少佐の指揮を受けた。また同年 7 月以降はさらに杭州駐在の齊藤季次郎大尉の指揮を受け、杭州を起点に一部は安徽省東南部におよぶ測図を行った（アジア歴史資料センター資料：C15120043100）。

この 7 月以降の測図にために、当該地域をカバーする「清國二十万分一圖」54 号、105 号、132 号、250 号、257 号、258 号、259 号の貸与を申請することとなったわけである（アジア歴史資料センター資料：C0912286700）。このうち 54 号、105 号、259 号は図 2 にもみえている。ただし参謀本部には保存用のものがあっただけのようである（**図 3** および**図 4** を参照）。

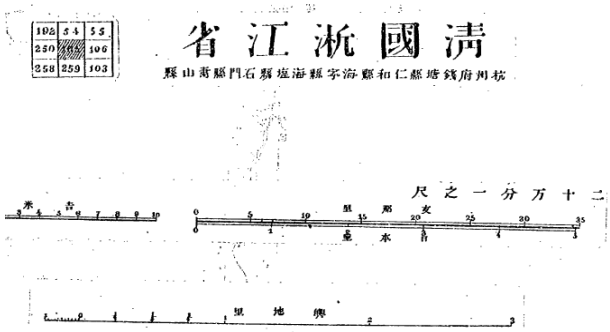

図 3: 清國二十万分一圖 105 号の裏に貼り付けられたタイトルと縮尺

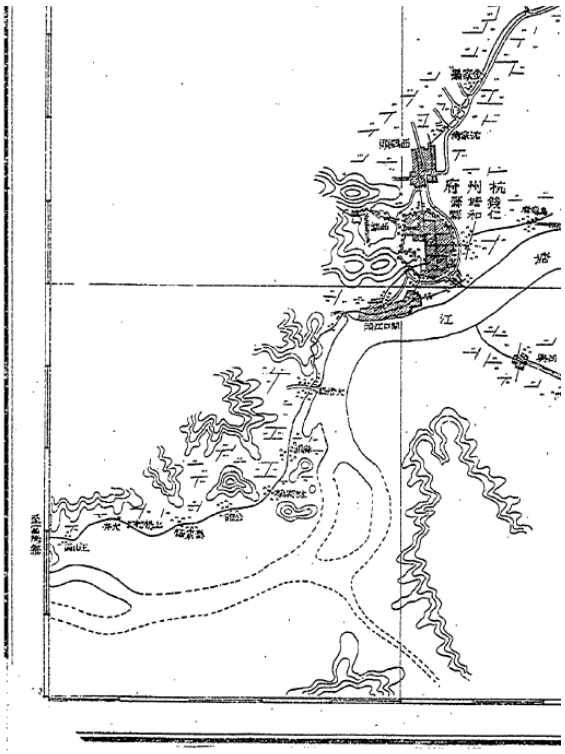

図 4 : 清國二十万分一圖 105 号にみられる杭州周辺（図の角の部分が切り取られていることに注意）

久間らがこれらの地図をどのように利用したかはわからないが、測図の行われていないルートを特定するとともに、経緯度の記載があるので、その基準としても参照されたと考えられる。

なお、この久間らの測図作業の成果は、「東亜五万分一圖厦門」（アメリカ議会図書館蔵 LCCN: 2016589307、1906 年刊）など福建省の 5 万分の 1 図などに反映されたと考えられる。この一部は国立国会図書館にも収蔵されており、今後の調査が必要である。

ところで、アジア歴史資料センターが公開している資料のなかに、もう一点福建省の「清國二十万分一圖」にふれたものがある（C09122864500）。「福州閩江平野ヨリ以南厦門附近ニ亘ル海岸ノ二十万分一地図」が福建省の当局者に知られ、それを提出せねばならなくなったことに関連する。ただしそれらを全部提供すると、新たに補足測図された部分や「各地ニアル砲台砲塁ノ符合」も含まれてしまうため、その提供の仕方を検討するわけである（1902 年 9 月）。この資料が作製された前後の状況が不明であるが、久間らの測量作業との関係も検討する必要があろう。

以上、「南清地方」の「清國二十万分一圖」について、小山史料に含まれる図を中心に検討した。図 1 に示した華北～満洲南部の「清國二十万分一圖」は、日清戦争・日露戦争の戦場付近をカバーする図としてさかんに使われ、その改訂版の刊行が確認できるものが多い。これに対して、「南清地方」に関連するもので、現存の確認が容易でないものが多いのは、作製されたものの、使われる機会が少なく、改訂などもほとんど行われなかったという事情があったのではないかと推測される。また作製されてまもなく、上記の東亜五万分一圖」のような、より大縮尺の図が登場して、使われる可能性がますます減少した可能性も考えられる。

ただし「清國二十万分一圖」は、日本が現地での調査をもとに広域的に作製した最初の外邦図でもあり、その全容を把握しておく必要性がある。とくに 1894 年に刊行した縮尺 100 万分の 1「假製東亜輿地圖」を引き継ぐ「東亜輿地圖」の作製が行われていた時期でもあり、その編集資料として一定の意義を持った可能性もあり、今後も注意していきたい。

付記：本稿のための研究には、JSPS 科学研究費、基盤研究 B（課題番号：20H01385）を使用した。記して感謝したい。

文献

高蘭 1997.「日清戦後の対清国経済進出構想：伊藤博文を中心に」日本歴史 593：49-64.

小林茂 2017.「『沿道指鍼』・『沿道圖説』・『沿道誌』」小林茂編『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』大阪大学出版会, 164-165.

小林茂編 2017.『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』大阪大学出版会.

菅野正 1990.「義和団運動後の福建と日本」奈良史学 8: 1-17.

高遠拓児 2007.「義和団事件後の参謀本部と南清官僚：一九〇一年における福島安正の南清旅行をめぐって」『山根幸夫教授追悼記念論叢：明代中国の歴史的位相』汲古書院, 213-238.

長南政義 2012a.「小山秋作」歴史群像編集部編『日露戦争兵器・人物事典』学研, 128.

長南政義 2012b.「福島安正」歴史群像編集部編『日露戦争兵器・人物事典』学研, 148.

陸地測量部 n.d. 『陸地測量部沿革史（草案）』（自明治二十一年五月至基本測図完了）（ただし第 2 次世界大戦後の日本地図資料協会刊による）.